令和元年度　第1回　教育総合研究所 運営委員会(記録)

期日：令和元年５月２０日（月）

会場：大垣市スイトピアセンター
学習館７階　会議室２

１　開会あいさつ

・研究所のリニューアルに伴い、教育総合研究所、教育情報センターを開かれた所内にした。
・昨年度いただいたご意見から改善点をもとに本年度の重点を中心に取組を説明していく。
・第２回は令和２年度の方向を示す必要があるため、この第１回では来年度に見通したご意見をいただきたい。
・運営委員の紹介

２　運営委員会 会長あいさつ

・小学校の学習指導要領も来年度から全面実施になる。
・令和の英訳をイギリスのＢＢＣ放送では Owder(秩序)＆Harmony とした反面、日本では Beautiful(美しさ)Harmony として、世界の領事会に向けて発信した。衝突そして矛盾のない平和なハーモニーな時代になるように願っている。
・いじめや不登校は大きな問題となっている。それだけでなく研究所は新しい教育についても積極的に引っ張っていく役割を担っている。
・本年度の重点を中心に新しい事業や働き方改革を中心とした取組を進めて欲しい。
・教育委員会全体として考えていきたい。

３　平成３１年度の事業報告と令和元年度の方向

〇全体構想

・教育委員会の組織の一つである。
・２グループ４担当制で組織している。教職員グループと児童生徒支援グループに分かれている。
・中期的な目標のもと本年度の重点と具体的な方策を示す。

〇教職員支援グループ

『研究・研修』

＜昨年度の様子＞

・昨年度の課題は、「すべての研修で『大変よかった』と回答する教職員の割合が昨年度 64%」となった。多忙化解消の視点から、事業数を増やすことは難しいと考えられる。
・「校外研修」「校内研修（ＯＪＴ)」「自己研鑽」を、個々の教職員が、自己課題に応じて、それぞれの機能を生かし、相互に関連を図りながら実施することが、効率的、効果的な研修につながる。
・今年度は、「校外研修」で使用した資料やパワーポイントを校内でも活用し、校内研修の効率化促進につなげる。

＜今年度の重点＞

（１）「訪問型悉皆研修の充実」
（２）「訪問型希望参加研修の充実」　特に　だれもが研修（２）「特別の教科　道徳」
（３）「集合型希望参加研修の充実」　夏季研修講座の内容の充実。

『教育情報』

＜昨年度の様子＞

・ＩＣＴを活用して指導できる教員の割合は、全国、岐阜県を上回り、指標の９０％に迫っているが、情報モラルの調査では、「家で携帯電話の利用の仕方を決めている」と回答した児童生徒の割合が全体で６５％となっているものの中学校の割合はまだ低い。現在ネット依存やゲーム依存など心配される。児童生徒、そして保護者の情報モラルへの危機意識をさらに高めていく必要がある。

＜本年度の重点＞

（１）ＩＣＴ機器を活用した授業の充実

（２）情報モラル教育の推進

〇児童生徒支援グループ

『教育相談』

＜昨年度の様子＞

・３０年度の３０日以上欠席した児童生徒数は、２９年度に比べて小学校中学校ともに増加している。

・集計結果から不登校の要因が複雑化、多様化していて要因がつかみにくくなっているため、個に応じた支援が必要となる。

・新たな不登校を生まないために早期発見・早期対応と魅力ある学校づくりが求められる。そして、不登校児童生徒への支援やそれに応じたほほえみ教室、ＨＳＳ、ＳＳＳの役割が求められている。

＜本年度の重点＞

（１）不登校の未然防止

（２）不登校の早期対応、学校復帰に向けて

『少年支援』

＜昨年度の様子＞

・昨年度のスクールソーシャルサポート事業の支援状況は、次のようになった。

【小学校】・・・学級内支援や別室支援が大きく割合を占めた。本年度も集団生活適応のための支援や別室での対応支援の要請が考えられる。

【中学校】・・・別室支援・家庭訪問支援が中心となった。支援する数は少ないが、不登校傾向の生徒への支援が中心となった。

・新規不登校児童生徒数については、教育相談と同様、増加した。

＜本年度の重点＞

（１）学校支援訪問

（２）ＳＳＳ事業の教室内、別室支援・登校支援

４　御意見

＜教務主任代表＞

・研究・研修について道徳について研修していただくことはありがたい。現場はどういう授業でどういう評価をするとよいかを考えるため参考になる。

・「これから研修」については、チームを組んでその後の意識向上にもつながる。

・教育情報センターには障害対応してもらい、助かっている。
・プログラミング教育について、他県の取組も知りたい。
・情報モラルについては校内でも広められていて、教職員にも児童生徒の取り巻く環境の中でどんな事案が起きているかを掴むきっかけとなっている。
・不登校の未然防止について把握していただくことはありがたい。らくらく校務支援システムの連携で欠席状況が調査できないか。
・学校職員が日頃できないことを、連携をしていただいているのでありがたい。
・プログラミング教育について、タブレットとアナログとの連携方法や活用方法が不安である。パソコンの扱いが小学校でどこまでできているのか。そして中学校でどんな接続ができるかを考えていけるとよい。

＜大垣市ＰＴＡ連合会代表（母親代表）＞
・プログラミング教育については、昔の学習内容にはなかったので学校でやっていただくことはありがたい。
・デジタル教科書を扱う授業があると、授業参観に行った保護者にとってもどんな学習をしているかがわかってよい。また、子どもたちの目線も前を向くきっかけとなっているのでどんどん利用して欲しい。
・インスタグラム、ツイッターが流行っている。友だちと会話をしている時でもスマホを持って遊んでいる実態がある。各家庭での使い方を考えたい。「いいね」の数が気になってしまうことや投稿・掲載するという行為は、年相応の姿には見えない。情報モラルについては引き続きやって欲しい。
・チェーンメールが広がっている。対応の分からない実態があり、保護者が放っておくように言っても不安でしかないため、親子の話し合う場も必要となる。
・１ヶ月の不登校数を開示してもらったことがあり、現在の状況を知ることができた。
・昼夜逆転は夜中に誰とつながっているか怖い。いろいろな専門家の意見を聞く中で朝の不安さから影響することもあることは現代の問題であると感じた。
・不登校について、ケース会議に参加させてもらって分かったことだが、保護者が拒否する例もあるという実態から親の考え方を変えていかないといけないことも勉強になった。
・ＬＩＮＥのＩＤを教えてと言っても教えてもらえないことがあると、仲間外しになってしまうという実態があり、いじめなどの原因があることも現代の問題である。多感な時期であるので丁寧に指導していただきたい。

＜学識経験者・青少年育成推進指導員＞
・実態を踏まえて、各グループのカリキュラムがあり、こういうことができれば不登校なども出ないのであろうと考えられる。理想であるが、実現できるようにして欲しい。
・学期の途中で不登校になる段階を掴むようにして欲しい。保護者と子どもと学校の３者でネットワークを結び付けて欲しい。
・就職するために英語を覚えることと同じように生活に必要な力を身に付けることと同じように考えて押しつけにならないような対応をして欲しい。学校に行きたくないとなってしまう考えも子ども自身が自分で見出せないということを理解して欲しい。
・核家族の中で、夕食の時間の遅さや食事内容も心配されている。満足に与えられていない子どもが

いることも知っていて欲しい。月２回の地区センターにおける食事の提供に子どもが多く来ている。
・保護者とのコミュニケーションが取れないまま、大きくなってニートになってしまったり引きこもったりしてしまう子どももいる。そして全国的にも増えてきている。
・国の方向は国で考えればよいが、大垣市としての独特の対策を考えていただきたい。

＜生徒指導代表＞
・家庭への対応は、第３者として学校職員以外の人が対応していただき現場ではできない支援ができるので助かる。
・オンラインゲームの広がりが気になる。時間が決められずに永遠に続いてしまう。殺人ゲームが発展していて小１の子でも楽しんでいることに違和感がある。それに対して保護者が何も言わず、ますますモラル低下につながってしまう。また、炎上騒ぎを何も思わない恐怖感がある。自分で撮った映像を簡単にＳＮＳへ投稿することも抵抗なくやってしまう傾向にある。
・教員のモラルや知識も心配される。２０～３０代の先生方が自分のスマホで撮影していることを指導してほしい。
・不登校などの問題も保護者が「まだいいんじゃない。」「私も子どもの頃そうだったから」と考えてしまっている。いずれ復帰できるからと願いをもっているのならよいが、面倒だからやらないという保護者もいることは周知して欲しい。
・他校や他郡市との交流できてしまう中学生の実態も知って欲しい。

＜教頭代表＞
・研究所職員が来校して相談してもらうことや支援をしてもらえることはありがたい。
・オンラインゲーム内でトラブルがある。言葉の使い方もよくない。動画視聴して、模倣する子どもたちになっている。具体例をもとに情報モラル指導をお願いしたい。
・保護者には、機能制限だけではどうにならないことも伝えて欲しい。ある商店が店を閉じざるをえない状況になった例もあるため、指導事例として挙げて欲しい。
・若手世代のモラル意識が低く、困っている。
・ネットやＳＮＳは、見えない相手とつながっていることを教職員にも保護者にも認識できるようにしたい。
・特に３月、４月が煩雑な作業となる。学校管理ＤＢ、校支援、らくらく校務支援システムの３つの連携がうまくいっていないため、一元化になっていくと現場の負担が減る。
・プログラミング教育については、中学校技術科の内容は小学校とのつながりを考えて進めて欲しい。小学校の方が中学校より進んでいるのでは、差が出てしまうので、よく吟味して欲しい。

＜幼稚園・幼保園代表＞
・幼児期の基礎がついていれば、小学校にもつながると感じた。
・職員や保護者の年齢層が若くなっているので、資質を向上させる取組がしたい。
・昼夜逆転の事実も小さいうちからの生活習慣が必要だと感じた。
・幼稚園や幼保園では、「たくましく生きる力を育成していく」ため、「いやなことはいや、分からないことは分からない」と言えることが後の情報モラルやいじめの問題に立ち向かっていける子どもの育成につながることを意識して指導に当たりたい。そのために思いを言葉で伝えることや遊びの

中で心を育めるように努めていきたい。
・情報モラル指導についは、幼稚園・幼保園でもやっていただきたい。
・チェーンメールについては、どうしていいのか分からない子がいるということだったので、小さい頃からきちんと言えるようにしたい。

＜校長代表＞
・「これから研修」については、大きな価値がある。初任者には初任者研修があるが講師にはないので、このような機会があるのはとてもありがたい。しかしながら、受講者が少ないことが気になる。この研修の価値が分かっているのか、周知する方法がないのか、これから研修の仕方がどうか、検討して欲しい。
・保護者啓発はとても大切である。保護者説明会などの場の工夫をしている学校もある。学校からの要請を待っているだけでなく、ＰＴＡ活動、地域の活動、母親代表、家庭教育学級、青少年育成などでもどんどんアクティブに広げていけるようにして欲しい。
・不登校については、家庭の教育力が低く、連携が取れない。家庭環境における不安さが子どもに影響を与えている。ケース会議の助言だけでなく、学校でできない家庭訪問や継続的な支援、昼間などの時間帯で家庭に働きかける支援をして欲しい。
・学校訪問時の認め励ます活動は、ぜひ継続して欲しい。

＜学校教育課長＞
・学校教育課と教育総合研究所の連携を図りたい。
・不登校の要因を分析するが、その後の未然防止はどんどんやって欲しい。そのときに学校教育課にできることを教えて欲しい。
・不登校の調査（教育総合研究所）、いじめの調査や生活安全課からの情報提供（学校教育課）となっており、情報共有ができていない。一体化しないとうまく支援できない。
・プログラミング教育を進めているが、体験することが目的にならないようにして欲しい。規模が違うので教育課程上で小学校は実施できればよい。今後は、市としてプログラミング的思考を育むための事例を各学校の教育課程上に位置付けて欲しい。実施するためには教員研修も必要となる。全国的には位置付いているが、どんな支援ができるのか考えたい。
・ＩＣＴ機器も学校教育課と一緒に考えていきたい。「ＩＣＴ機器を活用した学習」とした時に教員向けでなく、子どもにとってのいろいろな学習スタイルをうみ出して欲しい。
・働き方改革のため、教材、カリキュラム、指導案、教具の提供を進めて欲しい。

＜教育長＞
・研究所のあり方がどうか、学校でやれることは何か、研究所では何ができるか、これからスタッフが現在の人数でいるとは限らないのでどういう役割をもつか考えて欲しい。
・働き方改革の視点から、指導案を活用しているが、先生たちは利用しているのか把握して欲しい。働き方につなげて活用しているのか、活用していないのならどうすれば活用できるのか。もっとよい支援の方法はないか考えて欲しい。
・学校訪問して、学ぶ姿を見ていてもっと子どもの自己肯定感が低くなっているように感じる。認め

励ます声かけを教師の指導の基本的な構えとして広めて欲しい。具体的な場面でもって伝えて欲しい。

＜あいさつ＞

・「成果として見えてこない」というご指摘から研究所がやっていることが学校にどう生かされているのかもう一度見直したい。
・今年度は、「できる理由を考えて実践する」というコンセプトを持っている。そのため、「すぐやる・必ずやる・できるまでやる」、どうやってやったらできるようになるかを考えるという姿勢で進めていく。本日はどうもありがとうございました。